

# 「皇孫御誕生記念こども博覧会」についての考察

川 口 仁 志

## 1. は じ め に

1925年（大正14年）12月6日、皇太子（のちの昭和天皇）の第一皇女である<sup>てるのみやしげこ</sup>照宮成子内親王が誕生、これを記念して、「子ども」をテーマとする博覧会が、東京と京都において開催された。1926年（大正15年）1月13日から2月14日までの33日間、東京の上野公園不忍池畔において開催された「皇孫御誕生記念こども博覧会」（以下「東京こども博」と略称する）と、同年7月1日から8月20日までの51日間、京都の岡崎公園において開催された「皇孫御誕生記念こども博覧会」（以下「京都こども博」と略称する）である<sup>1)</sup>。

「東京こども博」の趣意書には、次のように述べられている。「皇孫御誕生は国を挙げてのよろこびであります、本社はこの国民的よろこびを具体表徴し、且つ之を永く記念すべく、御誕生の第一春を迎えて『皇孫御誕生記念こども博覧会』を開催致します。こども博覧会は、こどもの国の建設であり、そこにはこどもへの凡ゆる世界が展開されます、皇孫御誕生を奉祝し、記念し、併せて、こども愛育の効果を収むる上に好箇の事業であり、この博覧会の成功はひとり本社のみのよろこびでないと信じます。』<sup>2)</sup>

また「京都こども博」の趣意書には、次のように記されている。「『こども』博覧会は『こども』を中心とした『こども』の国に縮写図であります、国民が子供といふものに対して如何に注意してゐるか又注意せねばならぬかと云ふことをこの博覧会に於て現実に考察することが出来るのであります、ことに皇孫御誕生を奉祝記念し併せて『こども』愛育の効果を収むるといふことは甚だ有

意義の事業であると信じます」<sup>3)</sup>

両博覧会の規則を見ると、これらのことがより端的に述べられている。すなわち「東京こども博」の規則の第一条には、「本会は皇孫殿下御生誕を記念し児童愛育の効果を取むるを以て目的とす」<sup>4)</sup>とある。また「京都こども博」の規則の第一条にも、「本会は皇孫殿下御誕生を記念し児童愛育の効果を取むるを以て目的とす」<sup>5)</sup>と定められている。

このように、東京と京都の「こども博」はいずれも、二つの目的を掲げて開かれた。ひとつは、皇孫の誕生を記念し、皇室の慶事を奉祝すること、もうひとつは、国民を啓発し、「児童愛育」の効果をあげることである。この二つの目的を結びつけたところに、博覧会の特徴があったといえることができる



図1 「東京こども博」ポスター

(出所) 『皇孫御生誕記念こども博覧会誌』東京日日新聞社、1926年、図版。



図2 「京都こども博」ポスター

(出所) 『皇孫御生誕記念京都こども博覧会誌』大阪毎日新聞社、1927年、図版。

う。

皇室の慶事を記念して博覧会が開催されるのは、当時は珍しいことではなかった。たとえば1924年（大正13年）に、京都市の主催で岡崎公園において開かれた「東宮殿下御成婚奉祝万国博覧会参加五十年記念博覧会」は、「東宮殿下ノ御成婚奉祝ノ為」の博覧会で、「本邦産業並ニ貿易ノ状況ヲ展示シ斯業ノ進展ニ資スル」ことを目的とするものであった<sup>6)</sup>。また、1928年（昭和3年）に、やはり京都市の主催で市内の三会場において開かれた「大禮記念京都大博覧会」は、「今上陛下御即位ノ大典ヲ奉祝シ併セテ本邦産業及文化ノ進展ニ資スル為」の博覧会であった<sup>7)</sup>。

しかし、これらの博覧会の内容を見てみると、当時一般的に開かれていた勸業博覧会であり、「御成婚」や「御即位」に直接的に関連するテーマが設定されたわけではなかった。それに対して「東京こども博」や「京都こども博」は、皇室に「子ども」が誕生したことを記念すると同時に、「子ども」というテーマに内容を絞り込んだ博覧会であった。奉祝すべき出来事と博覧会の内容とが、「子ども」というキーワードで密接に結びついていたのである。

新聞社という民間企業が主催者となって開かれたという点も、二つの「こども博」の特徴である。「東京こども博」の主催は東京日日新聞社、協賛は文部省・東京府・東京市であった。「京都こども博」の主催は大阪毎日新聞社と東京日日新聞社、協賛は文部省・東京府・東京市・京都府・京都市・大阪府・大阪市である。ただし、1911年（明治44年）に東京日日新聞社は大阪毎日新聞社に合併されており、東京日日新聞はその新聞名を残して、経営権を大阪毎日新聞社に委譲していた。したがって博覧会的主催者は、一つの企業体だったことになる。

当時、「子ども」をテーマとする博覧会の開催を担っていた主催者には、自治体や教育関係団体ばかりではなく、民間企業も含まれていた。たとえば、百貨店宣言を行い、呉服店から百貨店へと脱皮しつつあった三越は、子どもを顧客としてとらえ、子ども用品を重要な商品として位置づけていくなかで、1909

年（明治42年）以降9回にわたって「<sup>こども</sup>児童博覧会」を開催している<sup>8)</sup>。また、箕面有馬電気軌道株式会社（のちの阪急電鉄）は、乗客の増加をはかるための方策として、沿線の郊外住宅地を開発するとともに、沿線に動物園などの娯楽施設を設けていたが、そうしたなかで1911年（明治44年）に「山林こども博覧会」を開催している<sup>9)</sup>。

営利企業の一つである大阪毎日新聞社が、いかなる経緯で「子ども」をテーマとする博覧会を開催するに至ったのか。そしてその博覧会のなかで、「子ども」や「子育て」について人々に伝えようとしたのは何だったのか。本稿では、そうした問題について考察することにした。

## 2. 博覧会開催までの経緯

日露戦争後の新聞社は、厳しい読者獲得競争のなか、販売促進をはかるために各種の事業活動を展開していた。そして当時頻繁に開催されていた博覧会にも積極的に協賛し、やがてそれを主催するようになっていく。また、家庭生活に関する情報を積極的に発信し始めていた新聞社は、そのためのメディアの一つとして博覧会を利用した。すなわち、紙面で「婦人」や「子ども」や「家庭」といった問題を取り扱ういっぽう、博覧会でも同様のテーマを取り上げていったのである。たとえば国民新聞社は、1915年（大正4年）、創刊25周年を記念して「家庭博覧会」を開催している<sup>10)</sup>。また読売新聞社は、1916年（大正5年）に上野公園不忍池畔において「婦人子供博覧会」を開催、1918年（大正7年）にも同じ会場で「第二回婦人子供博覧会」を開催している<sup>11)</sup>。

こうしたなか、大阪毎日新聞社は、1925年（大正14年）3月15日から4月30日までの47日間、大阪市の後援を受けて「大大阪記念博覧会」を主催している<sup>12)</sup>。この博覧会は、大阪毎日新聞が1万5千号に達した記念事業として、また、大阪市が市域を拡大し、いわゆる「大大阪」となったことを祝賀するための事業として、大阪毎日新聞社社長の本山彦一の発案で実施されたものである。博覧会会長には本山自身が就任し、天王寺公園と大阪城豊公園の二ヶ所を

会場として、あわせて8つの展示館が設けられた。

「大大阪記念博覧会」では、大阪という都市が博覧会のテーマに掲げられ、大阪のさまざまな文化の歴史や現状についての展示が行われた。「水の大阪」や「電化の大阪」など、大阪に関する27にわたるテーマが設定され、そのなかには「子供の大阪」というテーマも含まれていた。公式発表によれば、入場者総数は180万人をこえ、一日の平均入場者数は4万人という盛況であった。この博覧会は、「新聞社がほぼ独力で地域開発ないしその活性化のために企画し、成功させた最初の大博覧会」<sup>13)</sup>と位置づけられている。

この博覧会に取り組むことによって、大阪毎日新聞社は、博覧会実施のノウハウを蓄積し、こうしたイベントを成功させるにあたっての自信を深めた。そしてそれが翌年の「東京こども博」と「京都こども博」の開催へとつながっていくのである。

博覧会開催に至るまでの具体的な経緯を確認しておこう。「東京こども博」の計画が発議されたのは、1925年（大正14年）11月23日のことである。この日、東京日日新聞副主幹の島崎新太郎は、事業部助役の錦古里忠久をともない、上野駅を夜行で出発、北陸視察中であった本山社長を訪ね、博覧会の計画案の説明をした。翌24日には社長の決裁を経た旨が着電し、さらに25日には緊急臨時幹部会が開かれて、東京日日新聞主幹の城戸元亮から説明がなされ、博覧会の準備が開始される<sup>14)</sup>。

開催までの期間が短いという事情から、会場は新築せずに既存の建物を利用することになり、各種の博覧会に利用されていた上野公園内の日本産業協会所有の建物を会場とすることが決定した。しかし、この建物では「第二回化学工業博覧会」を開く計画が進行していたので、11月26日、現地工務係主任の錦古里らが化学工業博覧会理事と交渉し、「化学工業博覧会」の開催を延期して会場を「こども博覧会」に譲ってもらう承諾を取りつけている<sup>15)</sup>。

博覧会開催の決定がこのように急がれたのは、他に先駆けて開催を発表することによって、奉祝イベントの主催者の地位を確保したいという思惑があった

からではないだろうか。また、その準備が短期間で進められたのは、奉祝ムードが高まっているあいだに博覧会を開きたいという意図があったからではないだろうか。

中村是公東京市長は、東京日日新聞と東京市との共同主催というかたちで博覧会を開いてはどうかという提案をしたことがある。しかし東京日日新聞側は、すでに単独主催であると公表していたことから、変更はできないとし、東京市は協賛の立場に落ち着いた<sup>16)</sup>。本山が早々に博覧会の計画を発表したことによって、少なくとも結果的には、単独主催の地位が守られたことになる。

いっぽう、「京都こども博」開催の計画は、1926年（大正15年）1月10日の時点で、すでに存在していた。本山社長は、「東京こども博」の開会式に向かう車中に、京都支局長の上西半三郎を呼び寄せ、京都で同様の博覧会を開くための調査を命じている<sup>17)</sup>。すなわち本山社長は、「東京こども博」の開催以前から、「京都こども博」の準備を進めていたのである。

本山は、「皇室に最も御縁故の深い京都」において博覧会を開くことの必要性を感じていた。また「東京こども博」の成功に確信をもっていたのであろう。ただし最初の計画では、「京都こども博」は春に開催するはずであったが、会場に先約があったために、その開催時期は夏にずれこむことになった。

本山がこの博覧会に取り組んだ理由は何だったのだろうか。まず第一に、彼が皇室中心主義者であったことがあげられるだろう。彼は1926年（大正15年）の年始にあたっての所感のなかで、次のように記している。「最近 皇孫内親王殿下御降誕に際し、国民上下の表示せし祝意の盛なりしは、諸外国は固より悠久なる我が国史にも稀に見るところと申すの外なし。われ等は一時海外危激の思想に誤まれ、或は不逞漢の続出するなきやも危惧せしも、今や全くその杞憂に属せるを見て、衷心より欣快の感なきを得ず。蓋し皇国に生れて皇恩の厚きを忘る、如斯は未だ国体の精華を解せざる徒が、偶々一二知り得たる海外思想に中毒したるものに外ならず、然るに今や此等患者の跡を絶ち 皇孫御降誕に際し、祝賀の盛なる前古に比なかりし如き、全く雲霧の一掃を見たるもの

として深くこれを祝福する」<sup>18)</sup> こうした考えをもつ本山にとって、皇室の慶事を奉祝するための行事を自らの率いる新聞社が主催するという機会は、決して逃したくはなかったであろう。

また、本山が博覧会事業についての理解と経験を有する人物であったことにも、注目しておく必要があるだろう。彼は兵庫県庁在勤中、1881年（明治14年）開催の「第二回内国勸業博覧会」の出品勧誘の担当者を務め、また大阪毎日新聞社に迎えられたあとの1891年（明治24年）には、臨時博覧会事務局評議員として、博覧会に関わってきた<sup>19)</sup>。そして1903年（明治36年）の「第五回内国勸業博覧会」においては、大阪毎日新聞社の宣伝と読者の獲得をはかるべく、さまざまな企画を打ち出している。「大大阪記念博覧会」を発案し、博覧会会長に就任したことは、すでに述べたとおりである。

しかし、本山が「こども博」に取り組んだ最大の理由は、彼の新聞商品主義にあったと考えられる。彼は1919年（大正8年）、編纂営業合併会議の演説において、「新聞はやはり一個の営業機関である」として、次のような主張を展開している。「営業機関である以上、是非とも売れる新聞を作ることに努力しなければならぬ。…売れるといふことに就いては、多少読者の機嫌も取らねばならぬ。勿論新聞には主義本領がある。この新聞の主義本領を少しも冒されることなくして、しかも安く売らず、その間に好評を得るには、多少人気に投ずることに努めて行かねばならぬ。」<sup>20)</sup>

また本山は、「東京こども博」の慰労会においても、博覧会が「斯くも旺んな結果を見たことは、即ち新聞の宣伝力が与つて力がある、延いては我が社の威力を天下に示すこと、もなり、販売拡張その他凡ゆる場合に頗る有利となつて来る、前哨の歩兵を援護して戦を充分ならしむるは砲兵の段であり、此役回りを『こども博』は完全に遂行し得たものといへる」<sup>21)</sup>と語っている。

大阪毎日新聞と大阪朝日新聞は、当時の大阪ではトップの販売部数を誇っており、大阪における両者の競争は熾烈なものであった。そうしたなか、読者獲得をはかるための事業活動の一環として、大阪毎日新聞社は博覧会に出展する

ようになっていく。「第五回内国勸業博覧会」において、大阪毎日新聞社はこれを読者獲得の絶好の機会として利用した。そして「大大阪記念博覧会」では、主催者として成功をおさめた。次に、東京と京都の「こども博覧会」を主催することで、さらなる販売部数の拡大をねらったのである。

### 3. 博覧会の組織と規模

「皇孫御誕生記念こども博覧会」の特徴は、販売競争を繰り広げていた新聞社が、その競争を有利に勝ち抜くため、その主催者となって博覧会を開いたという点にあった。さらに博覧会の組織を見てみると、「東京こども博」と「京都こども博」のいずれにおいても、名誉総裁に東伏見宮妃周子、副総裁に清浦奎吾（子爵）、会長に本山彦一（大阪毎日・東京日日新聞社長）が据えられていることがわかる。二つの「こども博」の組織において指摘すべき点は、民間企業主催の事業でありながら、皇族を名誉総裁に迎えた点にあると言えるだろう。また、実際に皇族が博覧会を訪れるということもあったようである<sup>22)</sup>。こうしたことによって博覧会が権威づけられ、各界各層からの支持が取りつけられていったのである。

次に両博覧会の規模を確認しておこう。「東京こども博」の博覧会誌に記録されているところによれば、その規模は次のようなものであった<sup>23)</sup>

入場者数は33日間で465,108人を数えた。一日の入場者数が最も多かったのは54,970人、一日の平均入場者数は14,194人である。これらの数字は入場券の枚数を数えたものであるが、6歳未満の子どもは無料で入場していて、これら数字のなかには含まれておらず、入場者の多くが親子づれであったことから考えると、実際の入場者数はさらに多かったのではないと思われる。

博覧会の収入は233,629円84銭、支出は211,038円29銭であった。収入の大半は、入場券の売り上げと出品料である。ちなみに入場料は1人50銭、6歳以上12歳未満は25銭、50人以上の団体は2割引であった。また、施設の使用料金は、陳列棚が50円ないし60円、陳列敷地が1坪70円、館内販売館



売店が1小間80円であった。

収入から支出を差し引いた剰余金は22,591円55銭であったが、18,000円が東京市に（うち15,000円が東京市内小学校貧困児童のために、2,000円が託児所のおやつ牛乳代に、1,000円が市立幼少年保護所に）、3,500円が東京府に（子どものための社会事業費として）、1,091円55銭が財団法人大毎慈善団（東京日日巡回病院）に寄付されている。本山は、博覧会が営利目的の事業ではなく、博覧会そのものを通じて、また剰余金を寄付することによって、社会に貢献するための事業であることを強調している。

「京都こども博」の博覧会誌に記録されているところによれば、その規模は次のようなものであった<sup>24)</sup>

博覧会会場は3つに分かれていたが、その合計入場者数は1,509,544人にのぼった。一日の入場者数が最も多かったのは95,016人、一日の平均入場者数は29,599人になる。ただしこれは隣接する3会場の入場者数を合計した数字であり、同じ日に2会場あるいは3会場に入場した人もいたであろうことから考えると、実態としては入場者数はこれより小さな数字になると思われる。

期間中に出札所で販売された普通入場券は248,501枚（大人182,063枚、小人66,438枚）であったが、前売券は大小あわせて50万枚をこえる売り上げを記録しており、出札所で売られた券の二倍以上であった。前売券には、鉄道汽船会社の割引券や京都市内の五大名苑の観覧券が添付されていた。東京の場合とは異なり、京都の博覧会は開会までの期間に余裕があったので、前売券を大量に売りさばくことで、入場者数を確保しようという努力がなされたのであろう。

博覧会の収入は237,944円48銭、支出は221,493円84銭、収入の大半は東京同様、入場券の売り上げと出品料であった。ちなみに入場料は1人30銭、12歳未満は15銭、30人以上の団体には割引も行われた。剰余金16,450円64銭については、「東京こども博」の時のように府や市へ寄付することは見あわせられ、児童創作館の設備費消却のほか、児童創作館の巡回諸費引当金や、記念

館図録の発行費に充てられた。

以上検討してきたように、発表された入場者数と実際の入場者数とのあいだにはいくらかのずれがあると考えられるが、「東京こども博」の入場者 465,108 人と「京都こども博」の入場者 1,509,544 人をあわせると、おおよそ 200 万人ほどの人々を集めたということができる。どちらの博覧会も気候的には不利な季節に開催されたが、それを克服して成功したということができるだろう。また、「東京こども博」に比べて「京都こども博」では、いくらか規模を拡大している点にも注目しておきたい。人口規模などにおいて京都は不利な条件をかかえてはいたが、十分な準備期間を生かしての内容の充実や、前売券の販売努力が実を結んで、東京を上回る規模の博覧会を実現したと考えられる。

大正期に大衆を大量に動員した博覧会としては、約 750 万人を集めた 1913 年(大正 2 年)の「東京大正博覧会」や、1,100 万人以上が訪れた 1922 年(大正 11 年)の「平和記念東京博覧会」があげられる。こうした博覧会の規模には及ばないものの、「子ども」というテーマに限定した博覧会としては、東京と京都どちらの「こども博」も、大規模な大衆動員に成功した博覧会だったということができるだろう。

東京と京都の「こども博」が集客に成功した要因の一つは、新聞社がその宣伝力を駆使したことにあったと考えられる。宣伝にあたっては、ポスターやチラシなどの印刷媒体が大量に利用されたほか、自動車や飛行機による派手な宣伝も展開された。もちろん『東京日日新聞』や『大阪毎日新聞』の紙上は最大限に活用された。事前の準備の進捗状況や、開会中の会場の賑わいが、頻繁に紙面に掲載され、それらがすべて博覧会の宣伝の役割を果たしていたのである。

特筆すべきは、他社の新聞もまた広告を掲載し、博覧会の宣伝に加わったことである。本山は、東京市内の新聞通信社の代表を招待して博覧会への協力を要請した時、次のような挨拶をしている。「本会の趣意は、印刷物の通り、皇孫殿下御誕生の国民的奉祝であり、国民の事業として独り我が社の私すべき性質のものでないと信じます、勿論、天と時、共に悪いけれども人の和で此事業

を成功させなければなりません、随つて諸君の御援助と御好意とにお廻りする他にないので、何卒、何分の御声援をお願い致す次第であります。】<sup>25)</sup>

皇孫誕生を記念する国民的事業であるという博覧会の性格を利用しながら、本山は他社の協力を取りつけていった。皇室の慶事をとらえて自社の事業に結びつけた企画力が、広範なメディアによる宣伝を可能にしたのである。

#### 4. 博覧会会場と展示

それでは具体的に博覧会の会場を見ていこう。「東京子ども博」の本館に設けられた展示室は、「おもちゃ館」・「きもの館」・「教育館」・「運動館」・「栄養館」・「母の家」・「子どもの部屋」であった。それらに加えて、廉売館が出店し、娯楽施設が設けられた。娯楽施設のなかでは、パノラマやジオラマに鏡やガラスを組み合わせてつくられた「迷宮春の園」や、回転する台にのせられた紙製

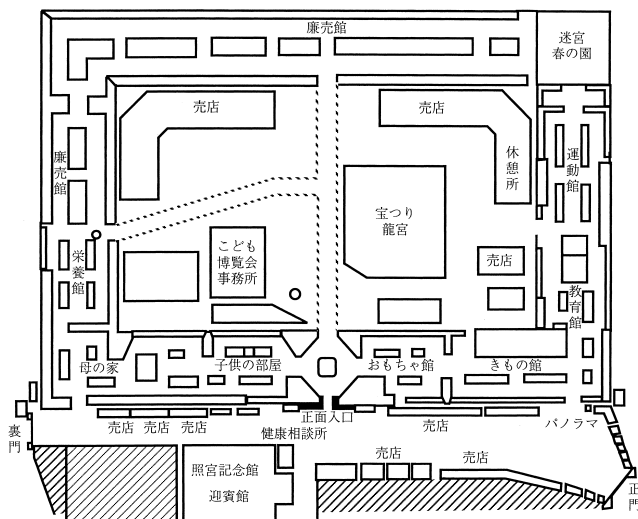


図3 「東京子ども博」会場配置図

(出所) 『皇孫御誕生記念子ども博覧会誌』東京日日新聞社、1926年、172頁。

あるいは布製の魚を釣り上げて賞品をもらう「宝つり竜宮城」が人気を集めたという。

また、別館として「照宮記念館」が設けられた。そこには明治天皇が幼い頃に愛用した「木馬の御運動具」や、照憲皇太后が幼い頃に愛玩した「御雛人形一組」をはじめとして、皇族の子ども時代の愛用の品々、あるいは子ども時代の作品などが展示された。

「京都子ども博」の会場は3つの会場に分かれていた。第一会場には、「こどもと母の家」・「運動館」・「工芸館」・「きもの館」・「電気館」・「おもちゃ館」・「栄養館」・「教育館」といった展示室に加え、「こども動物園」・「北極館」・「海底館」・「こども遊園」などの娯楽施設、そして廉売館が設けられた。第二会場には「こども汽車」・「こども馬場」などの娯楽施設と「児童健康相談所」が、第二会場の南に隣接して「児童創作館」が、そして第三会場には東京と同様に「照宮記念館」が設けられた。

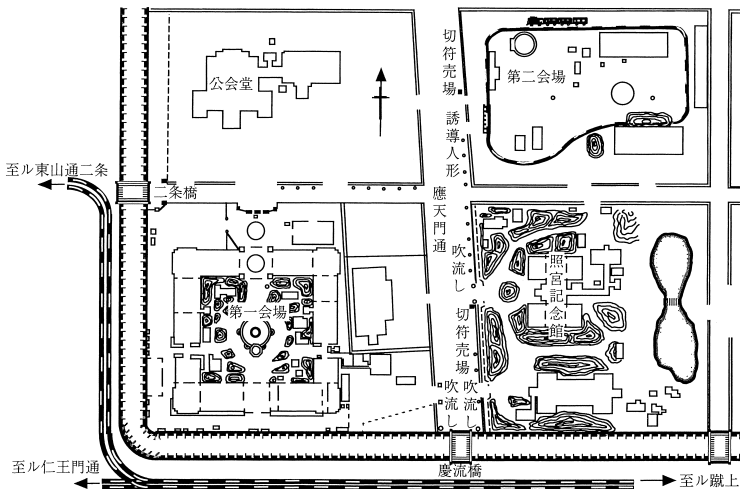


図4 「京都子ども博」会場配置図

販売部門や娯楽施設が準備され、消費や娯楽を求める来場者の要求に応えようとしたのは、当時の博覧会に共通して見られる特徴である。博覧会の遊園地化は、1903年（明治36年）の「第五回内国勸業博覧会」あたりから顕著になってきた傾向であり、子どもを重要な来場者と位置づける博覧会においては、こうした設備が設けられるのは当然であったといえる。

展示室に目を向けると、そこに陳列された展示物は、子どもの衣食住や遊びや運動など、子どもを取り巻くあらゆる物的環境であったことがわかる。それらに配慮し、よりよい環境を整備することが、子どもの保健や教育にとって重要な課題であるというのが、展示品から発信されたメッセージであった。

「照宮記念館」は、今回の「こども博」を特徴づけるユニークな空間であった。宮内省図書寮御用掛であり、記念館の顧問を務めた猪熊信男は、「京都こども博」での記念講演会において、「照宮記念館」について次のような講演を行っている。

「照宮記念館は二つの目的によつて拵へられました。一つは皇室の御産に関する諸調度並に御幼少時代の御風俗のもの、陳列そして夫につけ加ふるに民間の産に幼少時代関係のもの、陳列である。これは申すまでもなく皇室の御風俗を知つて親しみさを増し奉ると云ふ事と又民間風俗が皇室の御風俗とどれ丈けの交渉があつたものか、ともかく民間側から皇室の御めでたさを祝賀すると云ふ意味も加つて居る。又もう一つは国定教科書即ち小学校の歴史修身の本に出て居る人物の筆蹟並に遺物を一堂の下に陳列して教科書を読んだ児童をして其注意力を喚起せしめ一般のその父兄をして今さら乍らその人物に就いて印象を深くせしめようと云ふのであります。これ又国民思想上の為めと申さなければなりません。」<sup>26)</sup>

このように猪熊は、「照宮記念館」の目的は二つあると考えていた。ひとつは皇室に対する親しみをもってもらふこと、もうひとつは国定教科書に登場する歴史的人物を理解してもらふことである。前者についてさらにいうならば、猪熊が来場者に期待していたのは、民間の産育の風俗と皇室のそれとを比較し

ながら、皇室に対する親しみの念を深めてほしいということであった。

「照宮記念館」を見学した人々は、普通なら目にすることのできない、皇族の愛用した品々を目の前にして、畏敬の念を抱いたことであろう。またそのいっぽうで、子どもの誕生や成長を願う親としての自然な感情を共有していることに気づいたかもしれない。記念館を訪れた人々の思いは、畏怖と親愛という矛盾した感情が複雑にからまりあったものだったように思われる。「東京こども博」の博覧会誌によれば、記念館を訪れた「多数観覧者のなかには、明治天皇を始め奉り、各皇族方の御愛用品の前にて感激の余り泣く者さへあり、皇室と国民との親しみをより深くした」という<sup>27)</sup>

博覧会にこうした記念館が設けられた背景には、次のような状況があったと考えられる。

この時期、ロシア、ドイツ、オーストリアなどの強国の君主制が相次いで倒れ、君主制の世界的危機といわれる状況が到来していた。そうしたなかで1921年(大正10年)、皇太子(のちの昭和天皇)はヨーロッパ歴訪の旅に出発する。皇太子の外遊は皇室の歴史のなかで初めてのことであり、内閣総理大臣であった原敬が、宮中にあった反対を押し切るかたちで実現したものだという。皇太子の訪欧は、ヨーロッパ各国、とりわけイギリスから、これからの皇室のあるべき姿を学ぶためのものであった。

皇太子のヨーロッパでの評判は良好で、その振る舞いはメディアによって大々的に報じられた。皇太子の「平民的な御態度」は新鮮なものとして国民の目に映り、「英明なる皇太子」というイメージが定着していった。皇太子の帰朝直後、病弱であった大正天皇は政務から離れ、皇太子は摂政となった。若き皇太子は「我等が摂政宮」として、新しい時代の皇室のシンボルとなった。これを契機に、開かれた皇室がめざされるようになり、国民もそれを求めるようになる。

「こども博」の記念館に皇室の品々が貸し出され、出産や育児といった私生活が、それにまつわる品々というかたちで人々の目に触れる場が実現した背

景には、こうした事情があったのである。

## 5. 「子ども」をめぐる言説

東京と京都の「こども博」の会場の構成は、基本的には同じものであったといえることができる。それはまず、子どもづれに消費と娯楽を提供するための売店やアトラクションと、人々に児童教育に関する知識を普及するための展示場とに大別される。これらに加えて、博覧会の中心として存在したのが「照宮記念館」である。記念館は、皇室の産育をめぐる品々を展示し、「日本人が子どもを大切にする伝統を守ってきた」ことを示す場であった。そしてそれ以外の展示場は、「児童研究の成果をふまえた最新の製品」を展示し、これからの育児環境のあるべき姿を示そうとする場であった。会場や展示物についての検討から浮かび上がってくるのは、以上のようなことである。

そこで次に、博覧会という場で、日本の子ども観や教育観について、どのようなことが語られたかについても検討しておきたい。

文部大臣であった岡田良平は、「東京こども博」に寄せた「協賛の辞」のなかで、次のように述べている。「小児を愛護撫育するといふ方面より考慮すれば、従来の家族制度の結果から欧米の夫よりも遥かに意を強うするものがある、但し、これも只単に愛撫するといふに止まり、ともすれば夫れ以上を出ない場合が多いから左程に関心も出来ない」<sup>28)</sup>すなわち岡田は、子どもを「愛護撫育」するという点では日本は欧米に勝っていると述べながら、ただ「愛護撫育」するだけではいけないとも言うのである。それでは日本の子育ての何が問題とされたのだろうか。

岡田文部大臣は「東京こども博」の開会式式辞（代読）のなかで次のように述べている。「挽回児童心身の発達に関する研究は教育心理学の進歩により新著なる業績を挙げ為るに児童の教養に関する幾多の実際問題もまた漸く解決の緒を見るに至れりと雖も国民多数の児童に対する理解は猶未だ深しといふべからず国民の将来を図り国家百年の後を思ふに児童教養に関する知識の普及決し

て忽にすべきにあらざるなり」<sup>29)</sup>つまり岡田が問題にしているのは、日本の子育てが心情的な子どもの尊重にとどまっていた、教育学や心理学の知識をふまえた子育てになっていないという点である。

東京府知事であった平塚廣義も、同様のことを述べている。以下は「東京子ども博」に寄せた「協賛の辞」のなかの平塚の言葉である。「我が国に於て児童に関する研究が旺んになつたのは近來の事でありまして、漸く世人の注意を惹くに至つたのでありますが、未だ一般的には此方面の知識が幼稚であると思ひます。児童には児童の特性があり、児童独自の世界があるのでありますから、児童に関する問題に就いては、是を成人本位に取扱ふことは甚だ不合理であります。随つて児童の保健衛生に致しましても、皆児童そのものに対する深き知識と眞の理解とを有せなかつたならば、多くは失敗に帰すると考へます。」<sup>30)</sup>

日本では児童研究の成果が一般の育児に充分に取り入れられていないという指摘は、博覧会のさまざまな場面で繰り返しなされた。そして博覧会は、児童研究の成果を具体的な展示物を通して学ぶ場であると位置づけられていた。また、平塚の言葉のなかでも、「児童には児童の特性があり、児童独自の世界がある」というくだりは、「子ども」を「大人」とは異なる独自の存在としてとらえるようになった、この時代の子ども観を反映したものであるといえるだろう。

日本の乳幼児死亡率の高さは、この国の育児の抱える問題を端的に表わしているとされた。再び岡田文部大臣による「東京子ども博」への「協賛の辞」を見てみると、次のように述べられている。「元來、日本の学校教育は他の文明諸国に比して、決して遜色はないと信ずるけれども、幼児の死亡率といふ一点に於ては遺憾乍ら甚だ劣つてゐる。幸に、学生の体育方面では、最近特に注意が喚起され、身長 of 如きは昔日の比でなくなつたが、幼児死亡率は依然として頗る寒心せざるを得ぬ状態に在る。」<sup>31)</sup>

また、商工大臣であった片岡直温は「東京子ども博」の開会式祝辞（代読）



のなかで、「児童の生育如何は一国文化の表徴にしてわが国の如き多産と同時に児童に不幸の多きは家庭将来の希望を失はしめ社会国家の健全を図る上においても遺憾の点少からざるなり」と述べている<sup>32)</sup> 医学・生理学・栄養学などの知見をふまえた育児を実践し、他の先進国なみの低い乳幼児死亡率を実現していくことは、重要な国家的課題であると考えられていたのである。

児童研究の成果が生かされていないという問題のほかに、さらにもうひとつ、伝統的な子ども観に欠落しているとされたものがあつた。子どもを「国の宝」とみなし、「次代の国民」ととらえる考え方である。『東京日日新聞』の「こども博覧会」と題された記事には、次のように記されている。「わが国においても、子だからの思想は最も古くから行はれてゐた。しかし、その意義は兎角、一家、一族のたからとして、これを見るだけであつて、国のたから、世のたからとして、これを見る風に乏しかつた恨みがある。」<sup>33)</sup>

伝統的に日本では子どもは「子宝」と呼ばれ、「子どもは慈しみをもって育てられてきた」とされる。そうしたなかで『東京日日新聞』の記事が日本の子ども観の弱点として指摘したのは、子どもを「家の宝」としてのみとらえている点であり、その点を修正して子どもを「国の宝」として位置づけていくべきことが主張されたのである。

博覧会のなかでは、「子ども」を表わすのに「第二の国民」や「次代の国民」などといった表現がしばしば用いられた。そしてそのことによって、国家の消長が子どもにかかっていることが繰り返し強調された。

たとえば博覧会会長の本山彦一は、「東京こども博」の開会式式辞のなかで次のように述べている。「思ふに児童は第二の国民として将来国家の安危はその双肩に繋がるといはざるべからず。従つてその教養宜しきを得ると否とは他日国運の消長に甚大なる関係を有する事敢えて言を俟たず。当今教育の進歩日と共に盛なりと雖も児童教化の施設に到つては尚その余地を存すること多し。」<sup>34)</sup>

内閣総理大臣であつた加藤高明は「東京こども博」の開会式祝辞（代読）の

なかで、「次代の国民たるべき児童は正しく国の宝にしてその健全なる生育と発達を図るは実に重大なる国家的事業たり，邦家百年の計を樹てんとするものは平素深くこの点に顧みる所なかるべからざるなり」と述べている<sup>35)</sup>

内務大臣であった若槻穂次郎は「東京こども博」の開会式祝辞（代読）のなかで、「想ふに将来国運の振否は次代国民の育成の如何にあり従て児童の教化保育は社会の基本事業にして欧米各国専ら力をこの点に致し依て以て戦後国力の回復を計らんとするもの誠に故ありと謂ふべし然るに之を我国情に見るに児童教養に関する国民的用意未だ周到ならず動もすれば看却放任せられんとするの傾あるは実に国家の為め深慮とする所なり」と言っている<sup>36)</sup>

## 6. お わ り に

「東京こども博」の博覧会誌は、12月6日の様子を次のように記している。「午後八時十分、大内山に轟く皇孫御誕生を合図の号砲一発、すはこそとばかり胸と、ろかす程に、同三十二分に至り東京放送局はプログラムの放送を中止して七つの鐘を合図に軍隊喇叭の声勇しく、服部放送部長は先づ宮内省告示を朗々と読みあげ、陸軍戸山学校軍楽隊の君ヶ代奏楽により十三万のラヂオ加入者にその旨を告げ、加入者ならぬ人々とても号外その他にて午後八時十分正しく 皇孫内親王殿下御誕生の由を知つたのである。」<sup>37)</sup>

子どもが誕生するという出来事は、一般的には家族や親しい者のあいだの私的な出来事である。しかし、1925年にそれが皇室に起こったとき、放送を開始したばかりのラジオはたちまちそのニュースを発信し、マス・メディアの代表であった新聞もそれを号外で伝え、この出来事は国民周知のこととなった。

そしてこの皇孫誕生という出来事は、国民全体が奉祝すべきイベントとなっていた。各新聞社は、紙面というメディアを使って奉祝ムードを盛り上げたが、大阪毎日新聞社は、この奉祝ムードを増幅するための事業として、東京と京都において「皇孫誕生記念こども博覧会」を開催した。その背景には、本出版社長率いるこの新聞社が、新聞商品主義を掲げ、厳しい販売競争を繰り広げる

なかで、博覧会という事業を巧みに利用していたという事情があった。

この博覧会は、皇室の慶事を奉祝するという目的に加えて、子どもの教育のあり方に関わる情報を広く国民に流通させるという目的を掲げた。そこではまず、日本人が歴史的に子どもを大切にするという伝統を守ってきたことが強調された。そしてそれに加えて、子どもに関連する諸科学の成果を学び、子どもを取り巻く物的な環境を改善していかなければならないことが主張された。子どもを愛するという伝統は、子どもの環境をよりよいものにしていくという実践によってこそ実を結ぶのだというメッセージが、人々に伝えられたのである。

こうしたメッセージの背後には、「子ども」を「大人」とは異なる独自の存在としてとらえる子ども観と、「子ども」を「国の宝」と考え「次代の国民」ととらえる認識が混在していたことも見逃せない。「皇孫誕生記念こども博覧会」が開催された1926年、時代は大正から昭和へと移り、やがて教育の目標は国家にとって有用な国民の練成であるとされる時代を迎えることになる。「次代の国民」や「第二の国民」と呼ばれた子どもたちは、「少国民」と呼ばれるようになっていくのである。

## 注

- 1) 当初「東京こども博」の名称のなかには「御生誕」という表現が用いられていたが、その後は「御生誕」と「御誕生」とが混在して用いられるようになり、「御生誕」という表現に主催者がこだわっていたとは考えにくい。また、「京都こども博」の方が、会期・規模・入場者などの点で「東京こども博」を凌いでいたことから、本論文の題目には、二つの博覧会を指す名称として、「皇孫御誕生記念こども博覧会」という表現を採用した。
- 2) 『皇孫御誕生記念こども博覧会誌』東京日日新聞社、1926年、8～9頁。
- 3) 『皇孫御誕生記念京都こども博覧会誌』大阪毎日新聞社、1927年、4頁。
- 4) 前掲『皇孫御誕生記念こども博覧会誌』11頁。
- 5) 前掲『皇孫御誕生記念京都こども博覧会誌』7頁。
- 6) 『東宮殿下御成婚奉祝万国博覧会参加五十年記念博覧会誌』博覧会出版協会、1924年。
- 7) 『大禮記念京都大博覧会誌』京都市役所、1929年。
- 8) 拙稿「三越の『児童博覧会』についての考察」『九州造形短期大学紀要』第20号、1998

- 年, 61~75 頁。
- 9) 拙稿『『箕面山林こども博覧会』についての考察』『九州造形短期大学紀要』第19号, 1997年, 65~74 頁。
  - 10) 『国民新聞』1915年3月16日付。
  - 11) 読売新聞百年史編集委員会『読売新聞百年史』読売新聞社, 1976年, 255 頁。同『読売新聞百年史 資料・年表』読売新聞社, 1976年, 239 頁。
  - 12) 「大大阪記念博覧会」については, 博覧会誌に詳細に報告されている。大阪毎日新聞社編纂『大大阪記念博覧会誌』大阪毎日新聞社, 1925年。
  - 13) 津金澤聰廣「第9章 大阪毎日新聞社の『事業活動』と地域生活・文化—本山彦一の時代を中心に」津金澤聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』同文館, 1996年, 241 頁。
  - 14) 前掲『皇孫御誕生記念こども博覧会誌』8 頁, 314 頁。
  - 15) 同上書, 118 頁。
  - 16) 同上書, 30 頁。
  - 17) 前掲『皇孫御誕生記念京都こども博覧会誌』1 頁, 503 頁。
  - 18) 故本山社長伝記編纂委員会『松陰本山彦一翁遺稿』大阪毎日新聞社, 東京日日新聞社, 1937年, 33~34 頁。
  - 19) 故本山社長伝記編纂委員会『松陰本山彦一翁』大阪毎日新聞社, 東京日日新聞社, 1937年, 240 頁。
  - 20) 同上書, 351 頁。
  - 21) 前掲『皇孫御誕生記念こども博覧会誌』307 頁。
  - 22) 1926年(大正15年)2月14日付の『大阪毎日新聞』には, 次のような記事がある。「皇孫殿下の御誕生は実に国を挙げての慶福であります, 我社の分身たる東京日日新聞社はこの慶福を記念するため, 去る一月一三日から本日まで東京上野公園不忍池畔に『こども博覧会』を開きました, 而してその名誉総裁には畏くも皇族殿下を奉戴するの御許しを得ましたのみならず, 各宮様方も引続き台臨を賜はり親しく場内御観覧の上御賞讃の御言葉を頂きました」。
  - 23) 前掲『皇孫御誕生記念こども博覧会誌』269~286 頁。
  - 24) 前掲『皇孫御誕生記念京都こども博覧会誌』447~468 頁, 497~498 頁。
  - 25) 前掲『皇孫御誕生記念こども博覧会誌』57 頁。
  - 26) 猪熊信男「照宮記念館の出品に就て」『こども博覧会照宮記念館図録』大阪毎日新聞社, 1926年, 1 頁。
  - 27) 前掲『皇孫御誕生記念こども博覧会誌』212 頁。
  - 28) 同上書, 31 頁。
  - 29) 同上書, 149~150 頁。
  - 30) 同上書, 32~33 頁。
  - 31) 同上書, 31 頁。

- 32) 同上書, 154 頁。
- 33) 「こども博覧会」『東京日日新聞』1925 年 12 月 15 日付。
- 34) 前掲『皇孫御誕生記念こども博覧会誌』148～149 頁。
- 35) 同上書, 152 頁。
- 36) 同上書, 153 頁。
- 37) 同上書, 2 頁。

付記 本稿は平成 15 年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。